

## 臺灣學習者所尋求之理想的日語教師形象之研究 ——以高職日語學習者為對象——

黃國維

東吳大學日本語文學系博士生

### 摘要

臺灣從 2014 年 8 月開始義務教育延長為 12 年。高級職業學校為了能提高學生的升學率與求職競爭力，不斷追求教育品質的提升。

特別是中等教育裡日語教師所應具備的行動特質為何，勢必將成為社會各界深切探討的議題。

本研究著眼於學習者的角度，透過問卷發放，目的在分析理想的日語教師形象。其結果盼能對師資培育與教師自我進修，而有所啟發。

本研究以臺灣某女子高級職業學校之日語專業及非日語專業科別的學習者 562 名為對象，有效樣本 505 名(89%)。

由分析結果得知，最為學習者所追求的是教師與學習者間的貼心互動，另一方面，教師的教學資格、學位等則較不受重視。這意味著與其教師擁有崇高的身分和地位，倒不如在學生脆弱無助時，教師能以激勵或撫慰人心的話語之類、體貼用心的行動特質更為重要。

從此結果來看，不僅止是大學生，職業學校的學生也渴求師生之間的互動。希冀本研究的調查結果提供我國中等教育之日語教學之參考。

關鍵詞：12 年義務教育、高級職業學校、日語教師形象、因素分析、師資培育

# 台湾人学習者に求められる理想の日本語教師像について の一考察 —ある職業高校の日本語学習者を対象に—

黄国維

東呉大学日本語文学科博士生

## 要旨

台湾では 2014 年 8 月から義務教育が 12 年に延長されることが明らかになった。職業高校では進学や就職の競争力を高めるため、教育の質の向上が求められている。

特に中等教育の日本語教師が備えるべき行動特性とは何か社会各界から厳しく問われる課題になる。

本研究では、学習者の視点に着目し、質問紙を通し、理想の日本語教師像を分析することを目的とする。その結果は教員養成、教師の自己研鑽への示唆を与えると思われる。

本研究は、台湾のある職業女子高校の日本語主専攻と非専攻の学習者 562 名を対象にし、505 名の有効回答 (89%) を得た。

分析結果から見ると、学習者とのインターアクションの配慮が最も求められ、一方、教育資格や学位は重要視されていないことが分かった。教師の身分、地位の高さより、教師の励ましや労りの言葉など生徒の弱さに配慮する行動特性が重要であることが示唆される。

この結果を見ると、大学生のみならず職業高校の生徒も教師とのインターアクションへの欲求が見られる。本研究の調査結果が、我が国の中等教育における日本語教育の参考になれば幸いである。

キーワード：12 年義務教育、職業高校、日本語教師像、因子分析、教員養成

**A Study on the Image of an Outstanding Japanese Language  
Teachers in Taiwan:  
Focus on the Japanese Students of Vocational High School**

Huang Kuo-wei

PhD Student, Dept. of Japanese Language and Culture,  
Soochow University

**Abstract**

Taiwan will begin implementing a 12-year compulsory education policy in August, 2014. The vocational high schools seek ways to actively promote teaching quality because of raising the level of competitiveness, such as the proportion for students to enter the university or college, the rate of employment.

It would be aroused the discussing about the characteristics of behaviors of Japanese language teachers in the secondary education institutions.

The purpose of this study is to examine the image of outstanding Japanese language teachers from the students' point of view by using the questionnaire. The results obtained herein can suggest a good reference for the teachers' education and self-improvement.

This study surveyed the comments by 562 Japanese and non-Japanese Department students from a girls vocational high school in Taiwan. Analysis is based 505(89%) valid samples.

As a result, most students care about the concern for interaction rather than the teaching certification or M.A. degree aspect of Japanese teachers. That means that most students wish Japanese teachers could give a hand to them in difficulty, rather than a great capacity for teaching Japanese language.

The results showed not only undergraduates but also vocational high school students look after interacting with Japanese teachers. The results presented herein are useful reference to those teachers who teach Japanese as the second foreign language in vocational high school.

**Keywords:** 12-year compulsory education, vocational high school, the image of a Japanese language teachers, factor analysis, teacher education

# 台湾人学習者に求められる理想の日本語教師像について の一考察 —ある職業高校の日本語学習者を対象に—

黄国維

東呉大学日本語文学科博士生

## 1. はじめに

台湾の後期中等教育<sup>1</sup>は、現在、大きな転換を迎えようとしている。台湾教育部（文部科学省に相当）は 1983 年から義務教育の期間を延長する可能性について検討してきたが、2000 年代に入り、高校進学率の上昇（95%を超えた）に伴い、教育部(2013)が与野党において国民教育の延長に関する意識が固まったと発表した。2005 年に「十二年国民基本教育政策」（以下、「12 年国教」）を決定し、2007 年より「12 年国教」の関連政策を順次推進させ、2014 年 8 月から正式に完全実施されることになった。前期 9 年間の国民教育は、国民教育法及び入学条例に基づき、義務入学、学費免除、公教育を原則とする。後期 3 年間は高級中等教育と位置付け、現行の中等教育法と職業教育法を統合した「高級中等教育法<sup>2</sup>」に基づき、自主入学、学費免除、公・私立併存、無試験入学、一般教育と職業教育の両立などを原則とする。

高級職業学校(以下「職業高校」)とは実業を中心とする教育機関

---

<sup>1</sup> 台湾の義務教育は、6 歳から 15 歳まで、即ち、国民小学 6 年と国民中学 3 年の 9 年間で、国民教育（義務教育）と呼ばれる。義務教育に続く後期中等教育は 3 年間で、普通教育を行う高級中学と実業・職業教育を行う高級職業学校に分かれ、それ以外に 5 年制専科学校がある。

<sup>2</sup> 「高級中等教育法」は「高校教育法」であり、『總統府公報』第 7094 号  
<<http://glin.ly.gov.tw/file/legal/tw1007201305.pdf>>2014 年 11 月 20 日現在。

で、職業分野に必要な知識、実技を養成することが教育目標である。職業高校にある日本語学科を専門する学科名が「応用外国語学科(日文組)」としている。交流協会(2010)の『台湾における日本語教育事情調査 2009 年度調査報告』によると、応用外語科(日文組)(以下「応日科」)を設置した中等教育機関は 24 校で、生徒数は 7,398 人となっている。そして、総合高校で日本語専攻を設置する中等教育機関が 13 校で、生徒数は 1,322 人であると示されている。

学科名から考えると、職業高校における日本語教育は「応用」の部分と「日本語言語能力」の両方からなると考えられる。こう言った概念は林(2005)では、応用日本語学科が目指しているのは日本語という言語技能そのものだけではなく、それを道具として生かしながら、一つの専門分野を追求するものであると述べている。つまり、専門分野の学習は「応用」に当たる。林(2007)はさらに応用日本語の概念は「日本語+ $\alpha$ 」にあるという主張を提案した。職業高校の教育目標は言語学習の四技能のみならず、ほかに何か専門知識を身につけるべきだという考えである。

職業高校では競争力を高めるため、教育の質の向上が求められる。その中で、特に日本語教師が備えるべき行動特性とは何か社会各界から厳しく問われる課題になる。そこで、本研究では、学習者側の視点に着目し、日本語学習者がどのような日本語教師を理想だと考えているかを質問紙調査によって検討する。日本語教師像を構成する要素は多岐にわたるが、本研究では主に、教師の行為はどう求められるかという理想の日本語教師像に焦点を当て調査、分析を行うことを目的とする。その結果は高校教師の養成、教師の自己研鑽へ示唆を与えられると思われる。

## 2. 先行研究

日本語教師の条件については、専門家の意見、教師自身のビリーフ、そして学習者の希望などの観点から、質的または量的な調査、ならびに双方の要素を兼ね備え、多くの研究結果によって報告されている(王 2012)。

日本語教師が基本的に備えるべき力量・専門性とは何かという代表的な先行研究として、縫部他(2005)、縫部他(2006)を取り上げる。縫部他(2005)はニュージーランドの高校生 280 名と大学生 222 名を対象とし、「優れた」日本語教師の行動性に対する考え方を質問紙調査によって検証している。探索因子分析を行った結果、

高校生と大学生が求める日本語教師像の行動特性には相違がなく、「授業の実践能力」「専門的知識と教養」「教室の雰囲気作り」「学習者への配慮と教職意識」「指導経験と資格」「日本語力と文化的知識」という 6 因子から構成されているとした。

それに、縫部他(2006)は Moskowitz(1976)で得られた 110 項目をもとに、外国語教師が備えるべき 36 項目を抽出し、日本語教育にふさわしい項目を加えたり、外国語としての日本語教育に合致しない項目を削除したりして合計 41 項目からなる質問用紙を作成し、ニュージーランド、タイ、韓国、中国、ベトナム、台湾などの 6 カ国と地域において、18 大学 1441 名の日本語学習者を対象に質問紙調査を行った。探索的因子分析及び多母集団の同時分析を行った結果、どの対象国においても、教師の行動特性は同じ「日本語教師の専門性」「指導経験と資格」「教師の人間性」「コース運営」「授業の実践能力」の 5 因子から成り立っていることが明らかになった。

そのような研究の中で、台湾人学習者が求める日本語教師を扱ったものとしては、小林他(2007)、顔(2007)、顔他(2007)、顔・渡部(2009)、渡部・顔(2009)、跡部(2011)、王(2012)、顔(2012)などに散見される。

小林他(2007)は台湾の 5 大学の学習者を対象に質問紙調査を行っている。因子分析の結果、学習者が考える「優れた」日本語教師の行動特性は「学習者への配慮」「専門家としての教職歴」「日本語教師の専門性」「インターアクションへの配慮」の 4 因子から構成されるとした。また、共分散構造分析の結果から、学年によって教師に求めるものが異なることを指摘している。

跡部(2011)では、台湾の大学で日本語を学ぶ学生 1 名を対象に、インタビューを行い、TAE(Thinking at the Edge)の手法を採用し、質的に詳細に分析することで、学生にとっての理想の日本語教師像を、より深いレベルで捉えた。分析の結果、〈豊富な知識の効果的伝達〉〈ルールとペースの保持〉〈学生の状態把握〉〈家族的つながり〉という 4 つの重要なタームを得て、学生が考える理想の教師像を説明した。

王(2012)は台湾の非日本語学科の大学生 506 名を対象に、よい日本語教師についてマインド・マップ(mind map)を描いてもらう方法で調査したものである。調査結果を分析したところ、最も重要視されているカテゴリーが「授業」であるのに対して、「知識」カテゴリーはさほど高く期待されていないことが分かった。また、非日本語学科の大学生が情意面とインターアクションへの配慮ができる教師を求める学生が多いことが明らかにされた。

顔(2007)、顔他(2007)、顔・渡部(2009)、渡部・顔(2009)、顔(2012)といった研究は縫部他(2006)の研究に深くかかわり、同じ Moskowitz(1976)の 36 項目をもとに、日本語教育にふさわしい項目を加えたり、日本語としての日本語教育に合致しない項目を削除したりして合計 41 項目からなる質問用紙を用いた量的な分析である。

例えば、顔(2007)は台湾の 7 大学の日本語学習者(日本語専攻 633

名と非日本語専攻 464 名)を対象に実施した調査である。探索的因子分析と検証的因子分析による結果から見ると、大学生が考える「優れた」日本語教師の行動特性は、「学習者への配慮」、「専門家としての教職歴」、「日本語教師の専門性」、「インターアクションへの配慮」であることがわかった。また、各因子間の相関を分析した結果、「専門家としての教職歴」は専攻においても非専攻においても「学習者への配慮」「インターアクションへの配慮」との相関係数が低いことがわかった。つまり、学習者は「専門家としての教職歴」について「学習者への配慮」「インターアクションへの配慮」と区別して考える可能性があるとされている。

顔(2012)は、台湾の日本語専攻の職業高校生が考える「優れた」日本語教師の行動特性を明らかにするため、10 校に在籍する 898 名の日本語学科の学習者を対象とし、質問紙調査を行った。探索的因子分析を行った結果、日本語専攻の職業高校生が考える「優れた」日本語教師の行動特性は「教室の雰囲気作り」、「インターアクションへの配慮」、「教師の授業態度」、「専門家としての教職歴」の 4 因子から構成されているとした。

また、各因子の平均値と分散分析、多重比較の結果、学習者が「優れた」日本語教師の行動特性として強く認識したのは「Ⅰ教室の雰囲気作り」「Ⅱインターアクションへの配慮」「Ⅲ教師の授業態度」であり、これら 3 因子は同様な程度で重視されていた。一方、「Ⅳ専門家としての教職歴」は比較的に重視されなかった。

上述したように、学習者が求める理想の日本語教師像の先行研究の多くでは、質問紙による量的研究を用いて調査を行っている。これにより多くの学生が望む日本語教師像が得られる。

それに、大学、大学院などの高等教育機関における日本語教育に



関する研究が盛んでいる一方で、高校などの中等教育に関する研究は管見の限り、顔(2012)の日本語専攻学習者しかない。

また、台湾の職業高校における日本語学習者が求める日本語教師像について、顔(2012)で検討したが、対象者は日本語を主専攻として勉強している日本語学習者である。しかし、台湾の現状として非専攻の学習者は主専攻の学習者より数多く存在している。また両者のカリキュラムや授業の性質も異なる。そのため、主専攻、非専攻の学習者の視点から検討していく必要がある。

以上の研究を踏まえ、本研究では、今まで言及されていない台湾の職業高校に焦点を当て、学習者が求める理想の日本語教師像について、統計方法を用いて明らかにする。また、学習者の属性によって考え方が異なる可能性があるという先行研究の示唆から、本研究では専攻別を取り上げ、職業高校の日本語主専攻と非専攻の学習者を対象に考え方に相違があるかどうかについても検討する。

### 3. 調査概要

#### 3.1. 調査目的

調査の目的は台湾の職業高校で日本語を勉強している学習者が求める理想の日本語教師像を実証的に明らかにすることである。日本語主専攻と非専攻という二グループに分け、考え方に相違が見られるかどうか検討する。

#### 3.2. 調査対象者

「応用外国語学科(日文組)」が設置されている台湾のある職業高校に在籍する日本語学習者 3 学年、12 クラス 562 名に調査の協力を得た。調査票の回収率は 93.67%である。このうち、無回答などが含ま

れていた無効の調査票を除き、有効回答の 505 名(89.86%)を集計・分析の対象とした。また、調査対象の学校が女子高校なので、全員女性であった。内訳は表 1 のとおりである。

表 1 調査対象者の内訳

年次		学科		合計
		非日本語 専門学科	日本語 専門学科	
学年	一年生	0	93	93
	二年生	243	80	323
	三年生	0	89	89
合計		243	262	505

### 3.3. 調査方法

本研究は、より多くの学習者の意見を集めるため、量的な調査が適すると考えられる。具体的には質問紙で調査を行った。質問紙は顔・渡部(2009)の 41 項目を基本的に参考し、さらに、先行文献と現状に基き、22 項目を作成しなおした。理想の日本語教師像に関する中国語版質問紙を学習者に読んでもらい、回答は各項目についての重要性をリッカート尺度の 5 段階評定（1＝まったく重要でない、2＝あまり重要でない、3＝普通、4＝やや重要、5＝きわめて重要）で求めた。フェイスシートに、学年、学科や日本語検定試験の有無などを記入してもらった。

調査対象者に対して、授業時に質問紙が配布され、一斉集団方式による回答が行われた。質問紙はその場で回収された。所要時間は 10～15 分程度であった。

### 3.4. 分析方法

台湾人学習者に求められる理想の日本語教師像について検討するため、得られた回答を左から順に 1 点から 5 点で得点化した。そして、各項目の評定平均値と標準偏差を算出し、学科別の差異を見るため、独立したサンプルの  $t$  検定、つまり日本語専攻と非専攻という二つのグループの平均値間の差を検定する。

そして、分析には統計解析ソフト SPSS for Windows 22.0 を使用し、因子分析を行った。主因子解により各項目間の共通性を探り出し、因子軸のバリマックス(Varimax)回転を行い、学習者が考える理想の日本語教師像の因子を明らかにする。

## 4. 結果と分析

### 4.1. 調査の信頼性

信頼性については、まず調査項目の内部一貫性（信頼性）について、クロンバックアルファ(Cronbach's Coefficient Alpha)値を求めたところ、今回の調査票の信頼性は表 2 のとおりである。22 項目のクロンバックの  $\alpha$  係数は  $\alpha=0.933$  と高い数値が算出されていることから、信頼性が高い<sup>3</sup>調査であることが分かった。

表 2 本研究における調査の信頼性

Cronbach の アルファ	標準化された 項目に基づいた Cronbach の アルファ	項目の数	解釈
0.933	0.935	22	高信頼性

<sup>3</sup> 通常 0.7 以上を基準とする。平井明代(2012:149)にクロンバックの  $\alpha$  係数 0.80 を超えた場合は高信頼性を示す、とある。

また、本研究は因子分析の有効性を確認するために、**KMO** と **Bartlett** の球面性の検定を行った。その結果が下記の表 3 のように示された。

表 3 KMO および Bartlett の検定

Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性の測度		.947
Bartlett の球面性検定	近似カイ2乗	5648.163
	自由度	231
	有意確率	.000

本研究における理想の日本語教師像の調査について、**KMO** の標本妥当性の測度は 0.947 であった。また、**Bartlett** の球面性の検定で、有意率は $<0.001$  であった( $\chi^2(231)=5648.163, p=.000$ )ことから、十分な適合度が得られた。即ち、本研究に用いた調査票の有意性が確認でき、作成したこれらの全質問項目についての分析が妥当だと言える。因子分析を行っても問題がないと判断した。

#### 4.2. 学習者に求められる理想の日本語教師像の条件

まず、台湾の職業高校における日本語学習者が、求める理想の日本語教師像にはどういう条件が重要だと考えているか検討する。

各項目が「理想の日本語教師像」にとって重要であるかどうかを「まったく重要でない(1)」から「きわめて重要(5)」までの 5 段階評価で評定してもらった結果、つまり重要視されている度合いの高い順に並べると以下の表 4 のようになった。

表 4 求められる理想の日本語教師像の重要度

順位	調査項目	平均値 (M)	標準偏差 (SD)
1	7.学習者の感情を受け入れ、学習者が間違っても気まずい思いをさせたり、ばかにしたりしない。	4.56	.772
2	20.教室を和やかに、くつろいだ雰囲気にし、授業も面白く、楽しくする。	4.52	.727
3	9.学習者が分からないとき、分かりやすく説明する。	4.51	.735
4	11.学習者からの提案や考えを取り上げ、学習者をほめたり、励ましたりする。	4.46	.737
5	3.標準的な日本語を正確に、且つ流暢に使うことができる。	4.42	.876
6	14.暖かく、やさしく、思いやりがある。	4.40	.752
7	4.性格が明るく、楽観的であり、ユーモアもある。	4.39	.765
8	21.授業を妥当に構成し、学習者のニーズに対応したコース設計をすることができる。	4.38	.789
9	19.学習者の間違いを適切に訂正することができる。	4.35	.772
10	8.必要なら教科書に出ていないことも教える。	4.34	.826
11	12.学習者の質問に喜んで答え、日本語以外のことについても相談にのってくれる。	4.31	.782
12	13.言語学の基礎的な知識があり、客観的に分析することができる。	4.27	.799
13	2.教えることに熱心であり、楽しんで教えている。	4.27	.913
14	5.学習者に日本語で話すことを促す。	4.19	.869
15	22.教室内において学習者に規律を守らせる。	4.15	.881

順位	調査項目	平均値 (M)	標準偏差 (SD)
16	17.日本の文化・習慣・歴史及び日本語の古典について幅広く、十分な知識がある。	4.11	.866
17	18.勤勉であり、忍耐力が強い。	4.11	.907
18	15.外国語としての日本語教授法に熟達し、多様な教授法、教材、視聴覚教具を用いている。	4.02	.888
19	1.日本語教師として十分な訓練を受け、プロとしての自覚を持っている。	3.75	.949
20	6.世界経済・国際問題について幅広い知識がある。	3.66	.981
21	16.指導経験が長い。	3.65	.931
22	10.日本語教育に関する資格、或いは修士号(又はそれ以上の学位)を持っている。	3.41	.871
全体の平均値		4.19	

理想の日本語教師像に関して、職業高校の日本語学習者が最も重要視しているのは「7.学習者の感情を受け入れ、学習者が間違っても気まずい思いをさせたり、ばかにしたりしない。」(平均 4.56)である。以下順次、2位は「20.教室を和やかに、くつろいだ雰囲気にし、授業も面白く、楽しくする。」(平均 4.52)、3位は「9.学習者が分からないとき、分かりやすく説明する。」(平均 4.51)となっている。他に、「11.学習者からの提案や考えを取り上げ、学習者をほめたり、励ましたりする。」、「3.標準的な日本語を正確に、且つ流暢に使うことができる。」、「14.暖かく、やさしく、思いやりがある。」も平均値がかなり高く(4.40 以上)になっている。この結果から、学習者の「言

語不安」という情意面の要素が無視できないと逆に捉えられる。教師に認められたい一面が浮彫になっている。

表 4 に示した 22 項目全体の平均値は 4.19 もあり、平均値が 4.00 以上の項目が 18 項目と 8 割を占め、残りの 4 問も 3.00 を超えている。平均値が最も低かったのは「10.日本語教育に関する資格、或いは修士号(又はそれ以上の学位)を持っている。」の 3.41 であった。教師の資格の有無が学習者に与える支持と直接関係がないように思われる。

#### 4.3. 専攻による差異

次に、日本語学習者が求める理想の日本語教師像に日本語を主専攻として学習している学習者と第二外国語として学習している非専攻学習者の考え方に違いが見られるかを検討するために、専攻別(日本語主専攻学習者：262 人、非専攻学習者：243 人)について  $t$  検定を行った。分析にあたって、各項目の単純加算平均値を算出し尺度得点として検定に用いた。その結果が以下のように示す。

表 5 専攻別による  $t$  検定

項目	専攻	N	M	SD	T	Df	Sig. (2-tailed)
5. 学習者に日本語で話すことを促す。	非専攻	243	4.11	.903	-1.977	503	.049
	主専攻	262	4.26	.831			
14. 暖かく、やさしく、思いやりがある。	非専攻	243	4.51	.729	3.080	503	.002
	主専攻	262	4.30	.761			
16. 指導経験が長い。	非専攻	243	3.75	.934	2.465	503	.014
	主専攻	262	3.55	.920			
21. 授業を妥当に構	非専攻	243	4.46	.750	1.999	503	.046

項目	専攻	N	M	SD	T	Df	Sig. (2-tailed)
成し、学習者のニーズに対応したコース設計をすることができる。	主専攻	262	4.32	.818			

理想の日本語教師像に求めるものについて、「5.学習者に日本語で話すことを促す。」( $t(503)=-1.98, P<.05$ )、「14.暖かく、やさしく、思いやりがある。」( $t(503)=3.08, P<.05$ )、「16.指導経験が長い。」( $t(503)=2.47, P<.05$ )、「21.授業を妥当に構成し、学習者のニーズに対応したコース設計をすることができる。」( $t(503)=2.00, P<.05$ )、といった4項目で日本語主専攻学習者と非専攻学習者の間に顕著な差が観察できた<sup>4</sup>。

そのうち、「暖かく、やさしく、思いやりがある」「指導経験が長い」「授業を妥当に構成し、学習者のニーズに対応したコース設計をすることができる」の3項目は非専攻学習者のほうが有意に高い得点を示した。即ち、非専攻学習者が主専攻学習者より、「暖かく、やさしく、思いやりがある」「指導経験が長い」「授業を妥当に構成し、学習者のニーズに対応したコース設計をすることができる」という3項目を重要視している。非専攻学習者の場合は、日本語の授業が殆ど選択科目として設けられており、一名の教師が一つのクラスで聴く、話す、読む、書くといった四技能の指導を行っている状況が多い。そのため、学習者への配慮ができ、長い指導経験を持ついる日本語教師を求め、教師に依存度が高いように思われる。

一方、主専攻学習者のほうが有意に高かったのは、「学習者に日

<sup>4</sup> Sig.(2-tailed)が 0.05 以下となっている場合を指す。



本語で話すことを促す」であった。つまり、主専攻学習者が非専攻学習者より、「学習者に日本語で話すことを促す」という項目を重要視している<sup>5</sup>ことが分かった。即ち、主専攻学習者は自分に「話す」ことを試したい気持ちがあるが、レベルの高い教師に催促する役割をつとめてほしいという心理が読みとれる。

#### 4.4. 因子分析の結果

そして、潜在している因子の構造を見出すために、主因子解により各項目間の共通性を探り出し、さらに因子軸のバリマックス (Varimax) 回転を行い、因子負荷量を算出する。このような因子分析により、学習者が考える理想の日本語教師像のいくつかの因子を明らかにする。

ここでは、まず探索的因子分析によって、固有値 1 以上の基準で因子数を求め、バリマックス回転を行い、三つの因子を抽出した。固有値の推移と解釈可能性から、本研究は 3 因子解が妥当であると判断し、分析を行った。各因子に含まれる項目は因子負荷量 0.49 以上のものである。そのバリマックス回転後の因子負荷量の結果は表 6 のとおりである。

また、抽出した因子を構成する項目間の信頼性を確認するため、クロンバックの  $\alpha$  係数により内的整合性を求めた。さらに、因子内の相関関係を調べ、因子分析によって抽出された各因子が同じ方向性の項目の集まりであるかを確認した。すべての因子は因子内の方向性が同一であった<sup>6</sup>。

---

<sup>5</sup>  $t$  がマイナス (－) となっているからである。

<sup>6</sup> クロンバックの  $\alpha$  係数は 0.70 以上のものである。

表 6 求められる理想の日本語教師像に関する因子分析の結果

項目	I	II	III
第 1 因子「学習者とのインターアクション」(12 項目, $\alpha=.92$ )			
20.教室を和やかに、くつろいだ雰囲気にし、授業も面白く、楽しくする。	.824	.167	.072
14.暖かく、やさしく、思いやりがある。	.707	.008	.286
21.授業を妥当に構成し、学習者のニーズに対応したコース設計をすることができる。	.700	.351	.137
11.学習者からの提案や考えを取り上げ、学習者をほめたり、励ましたりする。	.678	.296	.291
7.学習者の感情を受け入れ、学習者が間違っても気まずい思いをさせたり、ばかにしたりしない。	.645	.437	.102
18.勤勉であり、忍耐力が強い。	.625	.039	.396
9.学習者が分からないとき、分かりやすく説明する。	.620	.464	.151
12.学習者の質問に喜んで答え、日本語以外のことについても相談にのってくれる。	.608	.295	.360
19.学習者の間違いを適切に訂正することができる。	.606	.374	.201
8.必要なら教科書に出ていないことも教える。	.558	.435	.165
4.性格が明るく、楽観的であり、ユーモアもある。	.553	.297	.065
22.教室内において学習者に規律を守らせる。	.496	.186	.375
第 1 因子寄与率(%)	25.713		
第 2 因子「専門家としての指導力」(4 項目, $\alpha=.80$ )			
3.標準的な日本語を正確に、且つ流暢に使うことができる。	.258	.772	.071

項目	I	II	III
2.教えることに熱心であり、楽しんで教えている。	.403	<b>.711</b>	.037
1.日本語教師として十分な訓練を受け、プロとしての自覚を持っている。	.095	<b>.672</b>	.291
5.学習者に日本語で話すことを促す。	.245	<b>.664</b>	.256
第 2 因子寄与率(%)	16.404		
第 3 因子「教職のキャリア」(6 項目, $\alpha=.79$ )			
16.指導経験が長い。	.096	.052	<b>.776</b>
10.日本語教育に関する資格、或いは修士号(又はそれ以上の学位)を持っている。	.082	.049	<b>.726</b>
15.外国語としての日本語教授法に熟達し、多様な教授法、教材、視聴覚教具を用いている。	.323	.186	<b>.628</b>
17.日本の文化・習慣・歴史及び日本語の古典について幅広く、十分な知識がある。	.336	.380	<b>.504</b>
13.言語学の基礎的な知識があり、客観的に分析することができる。	.419	.374	<b>.499</b>
6.世界経済・国際問題について幅広い知識がある。	.175	.328	<b>.498</b>
第 3 因子寄与率(%)	14.334		
累積寄与率(%)	<b>56.451</b>		

因子分析の結果、3因子の解釈が可能であった。第1因子は「20.教室を和やかに、くつろいだ雰囲気にし、授業も面白く、楽しくする。」「14.暖かく、やさしく、思いやりがある。」「21.授業を妥当に構成し、学習者のニーズに対応したコース設計をすることができる。」  
「11.学習者からの提案や考えを取り上げ、学習者をほめたり、励ましたりする。」「7.学習者の感情を受け入れ、学習者が間違っても気

まずい思いをさせたり、ばかにしたりしない。」などの 12 項目 ( $\alpha=.92$ ) からなっている。授業で学習者との相互作用に関する項目で構成されていたため、「学習者とのインターアクション」と命名した。

第 2 因子は、「3.標準的な日本語を正確に、且つ流暢に使うことができる。」「2.教えることに熱心であり、楽しんで教えている。」「1.日本語教師として十分な訓練を受け、プロとしての自覚を持っている。」「5.学習者に日本語で話すことを促す。」といった 4 項目 ( $\alpha=.80$ ) からなっている。教師の日本語力、日本語教師として訓練などの項目で構成されているため、「専門家としての指導力」と名付けた。

第 3 因子は、「16.指導経験が長い。」「10.日本語教育に関する資格、或いは修士号(又はそれ以上の学位)を持っている。」「15.外国語としての日本語教授法に熟達し、多様な教授法、教材、視聴覚教具を用いている。」「17.日本の文化・習慣・歴史及び日本語の古典について幅広く、十分な知識がある。」「13.言語学の基礎的な知識があり、客観的に分析することができる。」「6.世界経済・国際問題について幅広い知識がある。」といった 6 項目 ( $\alpha=.79$ ) からなっている。教職の知識や経験に関わる項目で構成されていたため、「教職のキャリア」との名前を付けた。

以上のように、学習者が考える理想の日本語教師像は、「学習者とのインターアクション」「専門家としての指導力」「教職のキャリア」の 3 因子から構成されていることが明らかになった。因子ごとにクロンバックの  $\alpha$  係数を求めたところ、第 1 因子  $\alpha=.92$ 、第 2 因子  $\alpha=.80$ 、第 3 因子  $\alpha=.79$  と、それぞれに高い一貫性が認められた。

分析結果から見ると、学習者とのインターアクションの配慮が最も期待され、一方、教育資格や学位は重要視されていないことが分かった。教師の身分、地位の高さはもとより、教師が学習者に対す

る励ましや労りの言葉など生徒の弱さに配慮する行動特性が必要とされることが示唆される。教師としてこの期待に応じるために、行なわなければならない。コミュニケーションの相手をつとめるように、常に心がけるべきである。

この結果は顔・渡部(2009)と同様ではあるが、職業高校の生徒の場合は特に教師とのインターアクションへの欲求が強いことが分かった。

## 5. まとめ

理想の日本語教師像に関して、職業高校の日本語学習者が最も重要視しているのは学習者の感情を受け入れ、教室をくつろいだ雰囲気にし、授業も面白くするなどのことから、台湾人学習者の「言語不安」という情意面の要素が無視できないとわかった。その一方、教師の資格の有無が学習者に与える支持と直接関係がないように思われる。

非専攻学習者が「思いやりがある」、「授業を妥当に構成する」といった結果から、教師に依存度が高いように思われる。日本語専攻学習者が、「話す」ことを試したい気持ちがあって、レベルの高い教師に催促する役割をつとめてほしいという心理が読みとれる。

なお、因子分析の結果を見ると、台湾人学習者が考える日本語教師像は「学習者とのインターアクション」、「専門家としての指導力」、「教職のキャリア」の3因子から成り立っていることを明らかにしている。本研究の調査した結果は、台湾における職業高校の日本語教師に参考になる情報を提示したと考えている。

## 6. おわりに

今回は調査校の制限で、性別の違いによる異同までは探究しなかった。今後は、男子生徒や、普通高校の調査を増やし、更に高校の日本語教師自身が考えている教師像についての調査も行い、複数のグループ間の比較、学習者と教師の間に相違があるかどうかを比較・検討することもある必要がある。

＜付記＞ 本研究は、台湾行政院科技部の「国内研究生出席国際学術会議」の助成を受け（補助番号：MOST-103-2922-I-031-002）、2014年7月11日にシドニー工科大学（オーストラリア）において開催された「シドニー日本語教育国際研究大会」で口頭発表を行い、その内容に加筆修正したものである。

## 参考文献

- Moskowitz,G(1976)Competency-based teacher education before we proceed.*Modern Language Journal* 60, pp.18-23.
- 跡部千絵美(2011)「JFL 台湾人学生の視点から見た理想の日本語教師像—TAE 理論を用いたインタビュー分析—」『台湾日語教育学会 2011 年度日語教学実践報告集』 pp.47-58
- E.A.チョードリー(1974)「日本語教師論—学習者の立場から—」『日本語教育』 25、 pp.31-34
- 王敏東(2012)「台湾の非日本語学科の大学生が望む日本語教師の姿—日本の調査との比較を兼ねて—」『台灣日語教育學報』 19、 pp.196-223
- 顔幸月(2012)「日本語専攻の高職生が考える「優れた」日本語教師の行動特性」『世新日本語文研究』 4、世新大学、 pp.165-186
- 顔幸月(2007)「台湾の大学生が考える「優れた」日本語教師の行動特性に関する調査」『東呉日語教育學報』 30、 pp.1-25
- 顔幸月・渡部倫子(2009)「台湾の大学生が求める日本語教師像—日本語専攻・非専攻による相違—」『東呉日語教育學報』 33、 pp.1-23
- 顔幸月・渡部倫子・小林明子・縫部義憲(2007)「台湾の大学生が求める日本語教師の行動特性—日本語専攻の場合—」『日本語教育』 133、 pp.67-76
- 教育部(2013)『中華民國教育統計 民國 102 年版』 pp.33
- 交流協会(2010)『台湾における日本語教育事情調査 2009 年度調査報告』 pp1-62
- 小林明子・縫部義憲・顔幸月(2007)「学習者が求める日本語教師の行動特性の構成概念」『広島大学日本語教育研究』 17、 pp.66-72
- 鈴木紳郎・中川良雄(2009)「対談今求められる日本語教師、教師養

- 成が目指すもの」『月刊日本語』22(3)、pp.12-15
- 縫部義憲・渡部倫子・佐藤礼子(2005)「日本語学習者が考える「優れた」日本語教師の行動拓成に関する調査—ニュージーランドの大学生を対象として—」『無差』12、京都外国語大学日本語学研究会、pp.93-99
- 縫部義憲・渡部倫子・佐藤礼子・小林明子・家根橋伸子・顔幸月(2006)「学習者が求める日本語教師の行動特性の構成概念」『日本語教員養成における実践能力の育成と教育実習の理念に関する調査研究 平成16年度～平成17年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書』(課題番号16320068、研究代表者・中川良雄)、pp.94-105
- 林伸一(2010)「期待される日本語教師像について—外国人留学生の期待と教師の自己点検の課題—」『大学教育』7、pp.57-68
- 林伸一・衛蕾(2010)「中国人学習者が求める日本語教師像—マインド・マップ調査に基づく考察—」『山口大学文学会誌』60、pp.25-48
- 平井明代(2012)『教育・心理系研究のためのデータ分析入門』東京図書
- 水谷修(1974)「理想的日本語教師像を求めて—日本語を教えるための知識と技能を中心に—」『日本語教育』25、pp.9-18
- 林長河(2005)「台湾における日本語教育の課題と展望—高教司所属高等教育機関を中心に—」『台湾日本語教育論文集』9、pp.233
- 林長河(2007)「応用日本語学科のカリキュラムをめぐる諸問題—銘伝大学を例に—」『台湾日本語文学報』22、pp.410
- 渡部倫子・顔幸月(2009)「台湾の現職日本語教師が考える「優れた」日本語教師の行動特性—母語別、性別、日本語教授年数別の検討—」『世新日本語文研究』創刊号、pp.105-124